

元朝秘史の区分と音訳漢字の分布

吉池孝一

—

元朝秘史にはブルカン・カルドゥンという名の山がしばしば登場する。この山名のブルカンは、「不峒罕」「不<sub>音</sub>峒罕」「不<sub>音</sub>峒<sub>音</sub>罕」「不<sub>音</sub>峒<sub>音</sub>罕<sub>音</sub>」「不<sub>音</sub>児罕」「不<sub>音</sub>児<sub>音</sub>罕」と漢字音訳される。「峒」「<sub>音</sub>峒」「児」はモンゴル語の音節末子音/-r/に対応し、山偏を持つ漢字「峒」は意識を加味したものといえる<sup>1)</sup>。小字「<sub>音</sub>」はモンゴル語音が/-r/であることを示唆する。そこで「峒」と「児」に着目し、この漢字を含む山名が元朝秘史全巻のなかでどのような分布を示すかを調査した<sup>2)</sup>。

元朝秘史は、漢字音を利用しモンゴル語を書いた部分とモンゴル語を漢語に訳した「総訳」より成り、両者に山名ブルカン・カルドゥンが含まれる。総訳では山名は音訳されるのが普通であるけれども、「那山」（あの山）「這山」（この山）あるいは「山」と意識される場合もある。また訳出されないこともあり、そのような場合は--と記す。調査にあたり、巻数、葉行数、節数は四部叢刊十二巻本によった。永楽大典十五巻本との間には幾つか異同があり（ ）で注記する。なお参考までに洪武残巻部分を~~~~で示す。表中には音訳語の一部である「峒」と「児」のみを記す。

巻	葉行	節	漢字音訳モンゴル語部分	総訳部分	
				音訳	意識
巻 1,	1右5	1	峒	児	
	3左3	5	峒	児	
	3左3	5	峒		那山
	6右3	9	峒	児	
	6右4	9	峒	児	
	巻 2,	27右2	89	児	児
41右3		97	峒	児	
44右5		100	児	児	
47右5		101	児	児(永楽 峒)	
48右2		102	児(永楽 峒)	児(永楽 峒)	
49右2		102	峒		山
50右2		103	児(永楽 峒)		山
50左1		103	峒	--	--

50左2	103	𠵹	--	--
50左5	103	𠵹	兒(永樂 𠵹)	
51右1	103	𠵹		這山
卷 3, 8左3	106	𠵹	𠵹	
10右3	107	𠵹	𠵹	
10左1	107	𠵹	𠵹	
17左4	111	𠵹	𠵹	
20右4	112	𠵹	𠵹	
21右5	112	𠵹	𠵹	
25右1	115	𠵹	𠵹(永樂 兒)	
卷 4, 43右3	145	𠵹	𠵹	
卷 5, 無し				
卷 6, 無し				
卷 7, 無し				
卷 8, 10右3	199	𠵹	兒	
37右1	205	𠵹	兒	
卷 9, 5左3	211	𠵹	𠵹	
卷10, 無し				
続巻 1, 無し				
続巻 2, 無し				

四部叢刊本と永樂大典本との間には幾つかの相違点がある。四部叢刊本によると、総訳の巻1,2は「兒」、巻3以降は巻8の2例を除き「𠵹」となる。漢字音訳モンゴル語の方は巻1,2のうち巻2に「兒」が含まれ、巻3以降は全て「𠵹」となる。永樂大典本によっても総訳の巻1,2に「兒」が集中するという傾向は動かない。このような偶然とは言い難い「兒」と「𠵹」の分布における一定の偏りは何を示唆するのであろうか。

## 二

漢字音訳モンゴル語部分のこれまでの研究により、元朝秘史の巻1,2と巻3以降は異質であるということが数項目に渡って確認されている<sup>3)</sup>。しかしながら寡聞にして漢語に訳された総訳部分について秘史分巻という観点より研究の対象となったことを知らない。前掲表の「兒」と「𠵹」の分布よりみて、総訳においても巻1,2と巻3以降とでは相違する部分のあることを見て取ることができる。これは巻1,2と巻3以降について漢字音訳モンゴル語と総訳とが平行する関係にある、少なくともそのような部分を含むということを示している。このことを確認できたからには今後以下の二点に留意し秘史の研究を進めるべきであらう。

1. 総訳の漢語を分析する場合、巻1,2と巻3以降とでは質を異にする可能性のあること

を念頭に置く必要がある。

2. 漢字音訳モンゴル語の巻1, 2と巻3以降との関係について何らかの研究の進展があった場合、その研究を総訳の巻1, 2と巻3以降との関係の研究に利用することができる。逆に総訳の巻1, 2と巻3以降との関係について何らかの研究の進展があった場合、その研究を漢字音訳モンゴル語の巻1, 2と巻3以降との関係の研究に利用することができる。

### 三

昨年、栗林均氏の期を画する論文「『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について」（『言語研究』121, 2002年）がでた。これによると与位格接尾辞の音訳漢字の一部の用法につき秘史第3巻から12巻のうち第8巻に例外が集中するという。山名の「児」と「峒」の用法についても第8巻の総訳が特殊であるという微証を前掲表より読みとることができる。両者は偶然に一致したのであろうか。また「児」と「峒」の用法について四部叢刊十二巻本と永楽大典十五巻本との間には相違する箇所が幾つか認められる。これをどのように解釈するかなど課題は少なくない。

#### 注

- 1) 陳 垣(1934)《元秘史譯音用字攷》(台北市：台湾商務印書館。初版1934年。影印一版1992年)を参照。
- 2) 本稿は対音対訳研究会(1995. 3. 20/21。於富山大学)で配布した資料に基づく。
- 3) 小澤重男(1997)「『元朝秘史』原文における「罷原作伯」についての覚え書き」『日本モンゴル学会紀要』27(1996), pp. 91-98、を参照。